

第16回 SKIP シティ国際 D シネマ映画祭 2019 (速報)



映画祭実行委員会会長
上田清司・埼玉県知事が挨拶



映画祭実行委員会副会長
奥ノ木信夫・川口市長



八木信忠・映画祭総合プロデューサー



土川勉・映画祭ディレクター

第16回 SKIP シティ国際 D シネマ映画祭 2019 は、2019年7月13日(土)～7月21日(日)、9日間、SKIP シティ(埼玉県川口市)で国際コンペティション、国内コンペティション、特集上映、関連企画、イベント等が、主催埼玉県、川口市、SKIP シティ国際映画祭実行委員会、特定非営利活動法人さいたま映像ボランティアの会にて開催された。

■公式サイト：www.skipcity-dcf.jp

ノミネート作品や、受賞作品の詳細などは、次号9月号で、映画テレビ技術協会名誉会員の中山秀一氏によりレポートされる。

本号では、9日間の映画祭の様態を写真を通して、速報する。

オープニング・セレモニーではまず、第1回から映画祭実行委員会会長を務めてきた上田清司・埼玉県知事が挨拶。「16回目を迎えた本映画祭からは、当初の予想以上に多くのクリエイターが育って嬉しい限りです。『孤狼の血』の白石和彌監督、『湯を沸かすほどの熱い愛』の中野量太監督ほか、素晴らしい監督さんがこの SKIP からスタートしています。昨年大ヒットを記録し

た上田慎一郎監督の『カメラを止めるな!』は、まさにデジタル時代の真骨頂を示した作品。この映画祭がクリエイターを生み出し、世界に羽ばたくチャンスを与えてきたことを誇りに思います」

映画祭実行委員会副会長の奥ノ木信夫・川口市長は、「コンペティション上映以外にも、多数の企画上映を用意しています。皆さんにぜひ楽しんでいただきたいと思います。今年も川口市をあげて全力で映画祭を盛り上げていきます」と意気込みを語った。

八木信忠・映画祭総合プロデューサーは、「映画祭を立ち上げた17年前は、まだデジタルシネマって何? という時代で、デジタル映画はまだ普及しておらず、フィルム作品での応募もあつたくらいです。しかし現在、日本でも世界でも作られている映画のほとんどはデジタル。映画祭の名前から“D シネマ”を外してもいいんじゃないかという意見もありましたが、映画祭に D シネマと名付けたのは我々が最初なので、冠は当分下ろさないことにしました。楽しんでいただければ幸いです」と話した。

続いて土川勉・映画祭ディレクターが、



オープニング上映は、イソップの思ッソポ Aesop's 2019年/日本/87分
構想3年!「カメ止め」クリエイター再集結!
異色のトリプル監督で贈る、予測不能の騙し合い!
監督:浅沼直也、上田慎一郎、中泉裕矢
出演:石川瑠華 井桁弘恵 紅甘 斉藤陽一郎
藤田健彦高橋雄祐 桐生コウジ 川瀬陽太 渡辺真起子 佐伯日菜子
製作:埼玉県/SKIP シティ彩の国ビジュアルプラザ 制作・企画:デジタル SKIP ステーション
配給:アスミック・エース

コンペティション部門に出品される全作品と、来場ゲスト、各コンペティション部門の審査員を紹介。「コンペティション上映以外にも、多数の企画上映を用意しています。皆さんにぜひ楽しんでいただきたいと思います。今年も川口市をあげて全力で映画祭を盛り上げていきます」と意気込みを語った。



オープニングパーティーでの「イソップの思ッツボ」。向かって右から浅沼直也監督、石川瑠華、佐伯日菜子、中泉裕矢監督、上田慎一郎監督



オープニングパーティーでは、恒例の実行委員、審査員、オープニング上映作品出演者による鏡割り。



授賞式の壺井濯監督、オープニングパーティーでのスタッフ、出演の五味未知子氏



★国内コンペティション優秀作品賞（長編部門）『サクリファイス』（日本 / 壺井濯 監督） 2019年 / 日本 / 76分

カルト、災害、未来予知、戦争…。様々なキーワードが交錯する重層的なドラマ作品。（あらすじ）かつて新興宗教団体〈汐の会〉で東日本大震災を予知した翠は、今は女子大生になっていた。その頃、大学周辺では三つの不穏な事件が起こり、同じ大学の塔子は猫殺しの犯人が同級生の沖田ではないかと疑うが…。

監督：壺井濯（Taku TSUBOI）

東京都出身。日本映画学校（現日本映画大学）卒業後、立教大学現代心理学部映像身体学科に入学。在学中より、篠崎誠監督『SHARING』（14）、『共想』（18）や黒沢清監督『岸辺の旅』（15）にスタッフとして参加。本作は第一回立教大学映像身体学科スラッシュ作品として選出され、これが長編初監督となった。

出演：青木柚、五味未知子、半田美樹、藤田晃輔、櫻井保幸、矢崎初音、下村花、三坂知絵子、草野康太、三浦貴大

受賞コメント：

平成の終わりに多くの凶悪殺人犯と呼ばれる人たちが一斉に死刑になって、何も語らないまま事件が終わって、令和を迎えて、令和令和だとみんな騒いで、そしてまた登戸の事件が起きて、そして先日京都アニメーションの事件が起きて、物語に、映画とかに出来ることは改めて何も無いなと物悲し

く思いました。3.11が起きた時もずっとそう思っていて、でも押し寄せる津波に対してできることは何もないんですけど、その後、これからくる第2波第3波の波とかナイフとか炎に対してはきっと物語はできるものが何か守れるものがあると思って、これからもここに一緒に参加できた若い方達と一緒に物語を紡いでいきたいと思っています。SKIPシティは一言で言うと多様性のある場所だと思いました。色んな国籍の方、外国の子供、障害のある人ない人、大人・子供・赤ちゃん…僕の友達も赤ちゃんを連れて作品を見に来てくれて、映画祭の保育サービスに赤ちゃんを預けて見に来てくれて。最後は赤ちゃんを抱っこして帰っていきました。今ある既成の権威とか、そういうものをみんなで一緒に壊して、明日はもっと良くなる、きっと良くなると思える社会を、ちょっと大げさですが作ってみたいのです。ありがとうございました。

★国内コンペティション（長編部門）観客賞 受賞『おろかも』芳賀俊監督、鈴木祥監督 2019年 / 日本 / 96分

「結婚式、止めてみます？」その時、私と兄の浮気相手の奇妙な共犯関係は始まった。高校生の洋子は結婚を目前に控えた兄・健治が、美沙という女性と浮気をしている

プレゼンター、審査員のジェyson・グレイ氏と芳賀 俊監督、鈴木 祥監督

現場を目撃する。衝動と好奇心に突き動かされて美沙と対峙した洋子は、美沙の独特の柔らかさと強さ、脆さに惹かれていく。

監督：芳賀 俊（Takashi HAGA）

周防正行監督『舞妓はレディ』（14）で撮影助手デビュー。以降、映画・CM・MVなどの撮影現場で撮影助手として活動。近年の参加作品は沖田修一監督『モリのある場所』（18）。また、撮影を務めた作品に各映画祭で高評価を受けた塚田万理奈監督『空（カラ）の味』（16）、鈴木祥監督『ボーダー』（11）がある。

監督：鈴木 祥（Sho SUZUKI）

日本大学芸術学部映画学科監督コース卒業。卒業制作の監督作品『ボーダー』（11）で映連文アワード2011 優秀作品賞を受賞。助監督として参加した作品に塚田万理奈監督『空（カラ）の味』（16）、村田唯監督『密かな吐息』（14）、『デソレ』（17）がある。今作で初の長編制作を行う。

出演：笠松七海、村田唯、イワゴウサトシ、猫目はち、葉媚、広木健太、南久松真奈
©2019「おろかも」制作チーム

受賞コメント：

＜鈴木祥監督＞ ご覧いただいた観客の皆様、本当にありがとうございます。そして、本作と一緒に作ってくれた俳優陣、そして一人ひとりがそれぞれの仕事にしっかり集中してくれたスタッフ、また芳賀君と僕の家族が、制作にあたって全てを支えてくれたので、改めてここで感謝を述べたいと思います。ありがとうございます。大学を卒業して約10年ぶりに芳賀君とタッグを組んで撮ったんですが、やっぱり映画を作っ



ジェysonグレイ氏と佐藤快磨監督

ている最中は、時間を忘れるくらい楽しいことで、今後も機会があればそういった制作を続けていきたいと思えます。この作品（『おろかも』）も、これを機会に様々な方にご覧いただきたいと思えます。

<芳賀俊監督> 自分の子供のように大切な作品が観客の皆様へ愛されたということが本当に嬉しいです。ありがとうございます。

★国内コンペティション（短編部門）観客賞受賞『歩けない僕は』佐藤快磨監督

2018年 / 日本 / 37分

リハビリの先には何が待っている？ 理学療法士と患者、二人の再生物語。

新米理学療法士の遥は、脳卒中で左半身が不随になった柘植のリハビリを担当することになる。「元の人生には戻れますかね？」と聞く柘植に、何も答えられない遥。現実と向き合う二人の日々が始まる。

監督：佐藤快磨（Takuma SATO）

長編監督作品『ガンバレとかうせえ』（14）が、PFF アワード2014で二冠を受賞し、第19回釜山国際映画祭に正式出品されるなど、高く評価される。ゆーぱり国際ファンタスティック映画祭に招待された『きっとゲリラ豪雨』（17）がある。

出演：宇野愛海、落合モトキ、板橋駿谷、堀春菜、細川岳、山中聡、佐々木すみ江

受賞コメント：

この『歩けない僕は』という作品は、リハビリテーション病院を舞台に、突然、脳梗塞や脳卒中になってしまったような方々、突然歩けなくなってしまった方々の物語ですけども、ずっと脚本を書いていく中で歩ける自分がこの映画を撮る意味みたいなものをずっと考えていまして、1年弱取材に通わせていただいたり、お話を聞いたりしたんです。撮影中から今回上映する直前まで、本当にその思いっていうものがずっと消えなくて。ただ、今回上映させていただいて、その後観客の皆様から質問だったり感想をいただいたことで、自分もこの映画に対する向き合い方が一歩前に進めた



『遠い光』宇津野達哉監督

ような気がして、やっぱり初めてお客様に見ていただいて映画になるんだな。とこの映画祭で感じました。またこの映画祭に帰って来られるように、面白い脚本を書いて精進します。

★国内コンペティション（短編部門）優秀作品賞受賞『遠い光』宇津野達哉監督

2019年 / 日本 / 19分

助けてくれたのはお母さんだったー 美しい山で起こったミステリアスな話。

雪の降り積もる山間の村で、妻を事故で亡くした男は娘と母の3人暮らし。老いた母は山を見つめ、男は娘を連れて山へ入り狩りを続ける毎日。ある日、山へ迷い込んだ娘の前に死んだはずの妻が現れる。

監督：宇津野達哉（Tatsuya UTSUNO）

日本映画学校24期卒業。在学中は中原俊監督に師事。日本で数年間助監督として活動中、交通事故に遭い、その保険金を元手に渡仏。2015年にフランスで初短編『À moi seul』を監督。ドラマ、映画などで様々な部署を担当しながら、主にメイキングディレクターとして活動中。そのほかPVやVPなどでディレクターや撮影も行っている。

出演：木村知貴、小林麻子、星野樹里、角張さつき、古見満男

受賞コメント：

ちょっと頭が真っ白です。受賞すると思っていなくて、荷物を控室に置くように言われていたのにしっかりと席に持って来ちゃったので、荷物が心配です（笑）。上映の時にも何度かお話をしたんですが、僕の幼少の時から猟に連れていってくれた叔父の奥さん、僕からするとおばさんが癌になったことをきっかけに書き出した脚本で、すごく個人的なスタートだったんですけど、映像化にいたっては千歳烏山というところで材木店の社長さんにたまたま居酒屋で会って、映画を作りたいんだと言ったら300万円ほど出してきて。そんな始まりだったんですが、まさかこんなところでこんな素敵な賞をいただくことになるとは思っていなかったの、本当に胸がいっぱいです。普



磯部鉄平監督

段は映画やドラマのメイキングや助監督として活動しているのですが、これからは監督として、長編制作や商業デビューできるように、一歩ずつ頑張っていきたいと思っています。本当にありがとうございます。

★SKIPシティアワード『ミは未来のミ』磯部鉄平監督

2019年 / 日本 / 62分

親友の名誉を守るため、僕らはある計画を立てた…。おかしく切ない青春グラフィティ。高三の拓也は秋になっても進路を決めかね、焦りを感じながらもダラダラと毎日を過ごしていた。ある日、仲良しグループの高木が交通事故に遭う。拓也は皆で交わしたある約束を果たすため仲間を集める。

監督：磯部鉄平（Tepei ISOBE）

ビジュアルアーツ専門学校大阪卒業。小谷忠典監督のドキュメンタリー映画『フリーダ・カーロの遺品』（15）に海外撮影スタッフとして参加。帰国後は映像フリーランスとして企業VR、MVのディレクターや、インディーズ映画のスタッフとして活動する。2016年から自主映画製作を開始。『予定は未定』（18）は、昨年の本映画祭で国内コンペティション短編部門優秀作品賞を受賞。

出演：櫻井保幸、佐野弘樹、カレン、松本知道、中藤契、新井敬太、桜木梨奈

『ミは未来のミ』磯部鉄平監督受賞コメント

去年はSKIPシティ国際Dシネマ映画祭の短編部門で優秀作品賞をいただいて、長編を撮って早くSKIPシティに帰ってきたいと、同じクロージング・セレモニーの会場で言ってから1年後、またこうやって戻って来て、賞までいただけて本当に嬉しいです。初長編作品には自分が高校3年生の時の話をやろうと前から決めていたので、その話で賞を取れて本当に嬉しいです。ありがとうございます。

その他気になった作品。国内コンペティション長編部門の2本を紹介する。



国内コンペティション審査委員長 荻上 直子氏、磯部鉄平監督



「ミドリムシの夢」真田幹也監督、出演：富士たくや、ほりかわひろき、今村美乃



「バカヤロウの背中」藤本 匠監督

★バカヤロウの背中 (The Idiot's Back)

2019年 / 日本 / 67分

ポンコツ派遣バイトの峻と愛情が暴走する雪。二人の婚前騒動を描く人情喜劇。おんぼろシェアハウスに住む結婚間近の峻と雪は、中国人留学生らの隣人に囲まれながらつましく生活していた。しかし、元恋人の軌余子が現れ、隣の部屋に暮らし始めたことで、抑圧と閉塞感が峻を襲い始める。

監督：藤本匠 (Sho FUJIMOTO)

2012年に金沢を拠点に演劇活動を展開。金沢美術工芸大学で彫刻を学びながら、演出家として自主公演を行うほか、演劇祭に自身の演出作を多数出品。舞台音楽家としても活動しロシア・韓国などの海外公演にも参加。2017年に武蔵野美術大学へ編入し映画制作を学ぶ。卒業後、現在はデザイン・映像制作会社に勤務。

出演：本城祐哉、鳩川七海、千国めぐみ、王細雨、中江聡、山城一乃、山村ひびき

★ミドリムシの夢 2019年 / 日本 / 86分

忌み嫌われたって、俺たちには守るべきものがある！負け犬たちへエールを送る痛快作。真面目なマコトといい加減な性格のシゲの二人組は、駐車違反を取り締まる駐車監視員 (ミドリムシ)。深夜勤務の日、いつものように違反切符を切った二人は、予期せぬ事件に巻き込まれていく。

監督：真田幹也 (Mikiya SANADA)

演出家・蟻川幸雄氏の元で修行を積み、06年文化庁委託事業「若手映画作家育成プロジェクト」に選出され、『Life Cycles』(07)を監督。『キスナ the Final』(13)で高砂市観光協会長賞、『オオカミによろしく』(14)でちちぶ映画祭2014グランプリを受賞。

出演：富士たくや、ほりかわひろき、今村美乃、吉本菜穂子、佐野和真、歌川椎子、長谷川朝晴、戸田昌宏

●国内コンペティション審査委員長 荻上

直子 Naoko OGIGAMI 映画監督 / 日本
デビュー作『バーバー吉野』(03)でベルリン国際映画祭児童映画部門特別賞を受賞。『かもめ食堂』(06)の大ヒットにより、日本映画の新しいジャンルを築く。『めがね』(07)はサンダンス映画祭などに出品され、ベルリン国際映画祭ではザルツゲーパー賞を受賞した。『トイレット』(10)では芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞し、『レンタネコ』(12)はベルリン国際映画祭パノラマ部門正式出



国内コンペティション短編「スカーフ」「ぜんぶ東京のせいだ」「産むということ」の面々。

品。『彼らが本気で編むときは、』(17)もベルリン国際映画祭でW受賞に輝く。また、NHK BSプレミアム「山口発地域ドラマ 朗読屋」(17)や、Netflixのコマ撮りアニメ「リラックマとカオルさん」(19)の脚本を手掛けるほか、CMなどでも活躍している。

◎審査委員長 荻上直子氏 (映画監督) 講評

今回ノミネートした皆さんの作品、楽しみに見させていただきました。デジタル化が進んで、クオリティは凄くアップして、このまま劇場でかけられるんじゃないか、という作品もいくつかありました。一方で、本当に作りたくて仕方がないパッションに満ちた、ほとぼしるような映画は近年なかなか見せてもらえていないのと、それがちょっと残念に思っています。私も自主映画出身です。だから皆さんがどれだけ映画を作りたくて作りたくてしょうがないか本当にわかっているつもりです。10年後、20年後もずっと作り続けてください。

●国内コンペティション (短編②)

★スカーフ 2019年 / 日本 / 33分

好きになったのは女の子、好きになってくれたのは男の子。雅は、恋い焦がれた女友だちの真広に思いを告げられず、好意を寄せてくれる匡との関係も中途半端なまま、高校卒業を迎えようとしていた。上京直前で焦った匡の思わぬ行動で、雅はようやく動き出す。

監督：埜場政行 (Masayuki MATOBA)

1978年生まれ、兵庫県淡路島出身。

出演：松山穂、守山龍之介、前田紗葉、長岡殿世、中西邦子、寺中空良、福元つくし

★ぜんぶ東京のせいだ 2019年 / 日本

/ 20分 平凡なサラリーマンと謎の美少女

が描くコミカルファンタジーワールド。夢を諦め、恋にも破れ、鬱屈とした日々を過ごす男の前に、不思議な少女が現れる。自分以外には見えない少女の存在に動揺しつつも、彼女の発する言葉は、止まっていた男の人生を動かし始めていく。

監督：村木雄 (Yu MURAKI)

脱サラ後、俳優として映画、TV、舞台に出演。

出演：村木雄、遠藤麗美、西條瑠美、森岡宏治、藤田健彦、生見司織

★産むということ 2019年 / 日本 / 27分

産むべきか、それとも…。出生前診断を巡る夫婦の葛藤と選択。産まれてくる子どもを心待ちにしている真島夫婦。しかし、ある日の検診で、医師から子どもに障害がある可能性を告げられる。出生前診断を勧められた夫婦は、今後のことを考え始める。

監督：マキタカズオミ (Kazuomi MAKITA)

脚本家。主な作品として、映画『思春期ごっこ』(14)、TVドラマ『横溝正史時代劇・人形佐七捕物帳』(16)がある。

出演：江原大介、久保山智夏、橋本拓也、石松太一、杉木隆幸、小西耕一、カノユースケ

★国際コンペティション 監督賞受賞 『陰謀のデンマーク』ウラー・サリム監督 (中央)

2019年 / デンマーク / 119分

右傾化する国家の問題をスタイリッシュな映像で描く、衝撃の政治サスペンス。コペンハーゲンで爆弾テロが起きてから一年後のデンマーク。間近に控えた選挙では、極右政党が勝利すると見られていた。一方対



「パッド・アート」監督兼女優のタニア・レイモンド氏(右)と「陰謀のデンマーク」ウラー・サリム監督



国際コンペティション審査員 佐藤 現氏(東映ビデオ株式会社 コンテンツ部 チーフプロデューサー 兼 宣伝配給室長/日本)、ウラー・サリム監督 右、ステファン・キタノフ プロデューサー



◎国際コンペティション 最優秀作品賞&観客賞 受賞『ザ・タワー』2018年/ノルウェー、フランス、スウェーデン/77分

難民キャンプに暮らす少女と曾祖父の強い絆を描く、感動のアニメーション。パレスチナ人の少女ワルディは、1948年からペイルートの難民キャンプに暮らす曾祖父シディが大好き。しかし彼から故郷の家の鍵を渡され、曾祖父がいつか家に戻るといふ夢を失ってしまったのかと不安になる。

監督：マッツ・グルードゥ (Mats GRORUD)
ノルウェー出身の映画監督・アニメ作家。長編映画、ドキュメンタリー、MVなどにアニメーターとして参加。1990年代にはレバノンのペイルート・アメリカン大学に通いながら、ブルジュ・バラジネ難民キャンプで英語とアニメを教える。そこで見聞した難民の話を中心に、初長編となる本作の脚本を書き上げた。

声の出演：ポーリーヌ・ジアテ、サイード・アマティス、スリマヌ・ダジ

受賞コメント：

※ パトリス・ネガン プロデューサーが代理受賞。

監督の代理でお話しさせていただきます。まずは、日本の観客の皆さんに本作を観ていただけたことを大変光栄に思うと共に、受賞できて嬉しく思います。また、観客の皆さんから色々な反応を頂きましたことも嬉しく思っております。日本においてはこういった難民問題は少し縁遠いかもしれませんが、恐らくこの映画が皆さんに響いたのは、本作が人間性あふれるものであり、そして描かれている難民キャンプでの彼らの現状に普遍性があるからなのではないかと思っております。アニメーションというのは非常に時間のかかる工程です。この作品もマッツ・グルードゥ監督と足掛け8年かけて作品を完成させました。監督がこの作品で何を描きたいのかというのは最初からハッキリしていました。何故なら、これは監督自身が実際に難民キャンプで過ごした子供時代に

立するグループも現れ、19歳のザカリアもそこで行動を起こすことを迫られる。

監督：ウラー・サリム (Ulaa SALIM)

1987年、デンマーク生まれ。イラク人の両親を持つ。自身の経験をインスピレーションとして映画制作に取り組んでいる。2018年にデンマーク国立映画学校を卒業し、プロデューサーであるダニエル・ミュンレンドルフと共に制作会社 Hyæne Film を設立。本作は長編デビュー作となる。

出演：ザキ・ユセフ、ムハンマド・イスマイル・ムハンマド、ラスムス・ビョーグ

受賞コメント：このような素晴らしい賞を頂けたことは大変光栄に存じます。映画祭の皆さん、審査員の皆さんに感謝を申し上げます。今回、日本に来るのは初めてですが、決して『ロスト・イン・トランスレーション』のようなわけのわからない状態にはなりません。非常に温かく、親切に迎えていただきました。人を敬う日本の文化が世界に広がっていかばと思っています。本作は、いわゆる最悪の事態を描いているわけですが、あくまでもこういったことも起こり得ないということを描いたつもりです。観客のみなさんに考えていただきたいのは、どのようにしてその中から最善の道を見出すかということだと思います。映画にはそういった力が宿っているとわたしは考えています。

また、デンマークでこの映画を作れたことも大変誇りに思っています。まさかこの遠く離れた日本の皆さんにも響くことになるとは想像もしていませんでした。色々な影響を皆さんからいただけて、一映画制作者、映像作家として希望に胸を膨らませることができました。次回、さらに良い作品を創ろうというモチベーションに繋がりました。

★★国際コンペティション 監督賞受賞『イリーナ』2018年/ブルガリア/96分

家族は私が必ず守る！命を懸けて困難に立ち向かう女性が見出した希望とは？ブルガリアの寒村に暮らすイリーナは、料理を

盗んでいたことがばれて勤め先のレストランをクビになる。同じ日に夫が深刻な事故に遭ってしまい、困窮した彼女は、金策のため代理母の申し出を引き受ける。

監督：ナデジダ・コセバ (Nadejda KOSEVA)

1974年、ブルガリアのソフィアに生まれる。国立演劇・映画芸術アカデミーを卒業した後、ベルリン国際映画祭で上映されたオムニバス作品『Lost and Found』(05)の一編で短編小説に基づく『The Ritual』を監督。短編『Omelette』(08)はサンダンス映画祭でスペシャル・メンションを受賞し、世界中の映画祭でも上映された。短編『Take Two』(11)はサラエボ国際映画祭で上映されている。長編デビュー作に当たる本作は、ブルガリア国立映画センターの協力を得て製作された。

出演：マルティナ・アポストロバ、フリスト・ウシェフ、イリニ・ジャンボナス、カシエル・ノア・アッシャー、クラシミル・ドコフ

★国際コンペティション 監督賞受賞『イリーナ』ナデジダ・コセバ監督

※ ステファン・キタノフ プロデューサーが代理受賞。

受賞コメント：

監督の代わりにになりますが、このような素晴らしい賞を頂き、ありがとうございますと申し上げたいと思います。とても嬉しい気持ちで一杯です。今回の来日で12日間ほど日本に滞在させていただき、非常に楽しいひとときを過ごしましたが、残念なことに、滞在中に京都アニメーションであのような事件が起きてしまい、非常に悲しい気持ちを抱きながら日本を去ることになりそうで、そこはとても残念でなりません。気持ちは遺族の皆さんと共にあることを申し上げます。また、世界がより平和にならんことを願っております。

本作はブルガリアの映画です。日本の皆さんがブルガリアで連想するものといえばヨーグルトや琴欧州だと思いますが、願わくはナデジダ・コセバ監督と組んだ三作目である本作によって、日本の観客の皆さんの目がブルガリアに向けられるきっかけになれば幸いです。



クロージングセレモニー。SKIP シティ国際 D シネマ映画祭 2019 実行委員と受賞者の皆さん。

基づく作品で、たくさんのリサーチを元にしてしています。なので、出来るだけ現実を忠実に描きたいという思いがありました。難民キャンプで暮らす人々がお互いに対して持っている尊敬の念や愛情、ユーモアの感覚などをしっかり描きたいという思いがあり8年かかったのです。我々ヨーロッパ、特にフランスにおいては、日本のアニメーションや漫画から多大な影響を受けています。本作のような大人向けのアニメーションを作っていくなかで、そういった日本の文化とヨーロッパの文化の架け橋的なことができることを大変嬉しく思っています。

◎審査委員長総評：受賞者のみなさん、改めておめでとうございます。いずれも素晴らしい作品でした。キャリアの浅い、新人という方々が作られたとは到底思えない、レベルも技術も志も高い作品ばかりでした。

最初、我々審査員が戸惑ったのは10本の映画すべてジャンルが違うことです。サスペンス、父の浮気など身近な問題があったり。特徴としては女性の監督がたくさんいました。色々な国の事情や状況によって自分の居場所を失った人々の内面を描いた作品もありました。ドキュメンタリーもあればアニメーションもあり。普通審査というとジャンルで括られてその中で優劣を競うものですが、この「映画作品に垣根はありません」というようなフリーな感覚、これぞDシネマ映画祭の良さだと思いました。

ここからはわたしの映画監督としての個人的なお願いになります。今日受賞された監督、スタッフ、関係者の皆さんはこれから色々な方々に連絡したりするでしょう。それを聞いた人たちが世界中で「本当に？うれしい！」と笑顔になるのです。我々、現場で映画を作っている人間はそういう喜びや事実を胸に、明日へ向かって一歩一歩進んでいきます。良い時ばかりじゃないで



プレゼンターは、国際コンペティション審査員ヘディ・ザルディ氏（フランス）、最優秀作品賞と観客賞に輝いた「ザ・タワー」のパトリス・ネザンプロデューサー



◎国際コンペティション審査委員：ワユニ・ハディ (Wahyuni HADI) シンガポール国際映画祭 エグゼクティブ・ディレクター/シンガポール

すから、苦しい時にもこれは映画を作る人間の支えになります。自分自身もこれまで色々な映画祭で様々な評価をいただいて、それは本当に有り難く身に染みて感じるところです。その裏返しとして、この映画祭にはある意味、重い責任が同時に生まれていると感じています。「俺はDシネマ映画祭で賞を獲ったんだ！」と誇りを持って、10年たっても20年たっても言えるように、この映画祭を高いレベルで運営し続けなくてはならない。そこには様々な問題があると思います。作品選定だったり、運営だったり、大変だとは思いますがなんとか盛り上げていただき、願わくば、商業的にもならず。どうしても規模が大きくなるとスポンサーが付いたり、なんとなく日本人は付度が得意だったりしますから。僕の立



◎国際コンペティション 審査委員長：三池 崇史 Takashi MIIKE 映画監督/日本 1960年生まれ、大阪府八尾市出身。

場から客観的に見ると、この映画祭はそういった部分から解放されていて、非常に個人的で自立していると思います。これは川口市が誇ることであるし、埼玉県も誇れることであると思います。こういった喜びの場を作っていただいた映画祭の関係者の皆さまに、映画の現場で動いている人間を代表しまして、大変かとは思いますが今後もこの素晴らしい映画祭をこのまま続けていってくださいますようお願いいたします。また、僕らで出来ることがあればご協力させていただきたいと思います。本当に有意義な時間を過ごせていただきました。次を作っていく監督たちの作品に出会えたことを幸に思っています。…俺も引退までは頑張りたいと思います。ありがとうございました。と締めた。